



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〔紹介〕 第2期生太田稲造のイラスト入り書簡に見る札幌農学校（1）
Author(s)	井上, 高聡; Inoue, Takaaki
Citation	北海道大学大学文書館年報, 11, 122-134
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61491
Type	other
File Information	ARHUA11_005.pdf



< 資 料 >

〔紹介〕 第2期生太田稲造のイラスト入り書簡に見る札幌農学校 (1)

井上 高聡 (解説)

はじめに

東京大学予備門に学んでいた新渡戸稲造¹⁾は、1877年8月、札幌農学校に第2期生として入学する。当時は実父新渡戸十次郎の弟である太田時敏の下に養子に入っていたので、太田姓を名乗っていた。札幌農学校入学が決まった1877年8月から卒業翌年の1882年7月までに新渡戸が養父などに宛てた書簡29点を、盛岡市先人記念館が所蔵している。新渡戸の養女の新渡戸琴子氏と、琴子氏子息の誠氏が寄贈した資料である。

既に東京女子大学新渡戸稲造研究会編『新渡戸稲造研究』(春秋社、1969年10月)がこれらの書簡の活字起こしを掲載しているが、新渡戸が札幌農学校での生活の様子をイラスト入りで伝えた非常に貴重な資料であるため、改めて翻刻を行ない、大意と解説を加えた。

本稿では、札幌農学校に入学した1877年に発信した3通を翻刻した。新渡戸は札幌農学校入学への意志、東京から札幌までの旅程、札幌農学校の様子や学校生活などを詳しく書き送っている。

〔資料1〕 1877年8月17日付け太田時敏宛て太田稲造書簡 (新渡戸稲造資料51)

〔資料2〕 1877年9月30日付け太田時敏宛て太田稲造書簡 (新渡戸稲造資料52)

〔資料3〕 1877年10月27日付け太田時敏宛て太田稲造書簡 (新渡戸稲造資料50)

(いずれも盛岡市先人記念館所蔵)

〔資料1〕 1877年8月17日付け太田時敏宛て太田稲造書簡

日々暖気ニ御座候得共 御尊父様ニ於而者益々御勉勤之由乍恐奉賀候

私事去年ニも御願申上候如く先月開拓使札幌農学校官費生ニ相成候て兩三日中ニ北海道へ出立仕り候

亦た他日志を立て志後轟々たる人物ニ相成候て御応面致志可く候間必々御心配無之候様更ニ御願申上候候令遠国へ参り候ても御名エ当たる不義等者仕り間敷候委敷事者宿元へ書置候間御帰京之節宜く御覧被遊候様御願申上候

○たらつねニ者やうわかれて遠国へ行く不孝も只た皇国之為免

○北国もいとわづ開らく稲之花

○国益を思ひ者^{〔は〕}軽ろく我が命^{〔め〕}

明治十年第八月十七日
御尊父様

稲造

〔大意〕

暑い日が続きますが、父上様は益々ご勉励のこととお慶び申し上げます。

私は昨年もお願ひ申し上げましたように、先月、開拓使が開設した札幌農学校の官費生徒となり、二、三日中に北海道へ出立します。

また、将来、志を立て立派な人物となってお目に掛かりますので、ご心配なされないようお願い申し上げます。たとえ、遠地へ参りましても家名を汚すような不義理などはいたしません。詳細は宿元へ書き置きをしましたので、帰京されましたらご覧下さいますようお願い申し上げます。

○たらちねに 早う別れて 遠国へ 行く不孝もただ 皇国のため

○北国も 厭わず開く 稲の花

○国益を思わば 軽ろく 我が命

明治10年 8月17日

父上様

稲造

〔解説〕

1876年7月、札幌農学校開校に当たり、開拓使は第1期入学生を東京英語学校で募集した。このとき太田稲造も応募し、W. S. クラークらの面接試験に合格した。しかし、札幌農学校では規則で「生徒ハ十六歳以上」と定めていた²⁾。数え年15歳であった太田は入学することができなかった。

翌1877年、札幌農学校は第2期生も東京大学予備門（東京英語学校を改組）から募集を行なった。太田はこの年も応募し、6月に官費生徒として入学することが決まった³⁾。東京大学予備門からは太田を含め11名、工部大学校から5名、長崎英語学校から2名の計18名が第2期生として札幌農学校に入学することとなった⁴⁾。

〔資料2〕 1877年9月30日付け太田時敏宛て太田稲造書簡

日々益々寒気ニ相成候得共 御尊父様御始メ皆々様御壮健ニ御座候得者私義実尔幸福と存候也

就而者先達御志願ニ而西国へ御出ニ相成候て空志く不軍師ニ而御還リニ相成候由乍私も誠ニ残念ニ存候然シ一己之念^{〔し〕}ニ志^{〔し〕}て皇国之幸福者私共^{〔敢〕}敗て愚説を論スルニ不足

旅中記

○明ニ明治十年第八月二十七日午前十時二十五分友人七名と共に馬車ニ而東京を出立志南品川ニ至リ同日午後第五時開拓使御用船玄武丸号ニ乗組翌朝二時半品川沖ヲ発シタリ^{〔し〕}

○清風、静波、満月、皆我等ヲ楽シマスメタリ然シ翌朝一時間計リ波荒クシテ既ニ船病ヲ病マンシタリ勿論船中ハ上等部屋ニ候得共何分一間四方ノ室ニ寝台有リテ人員四名ナリシガ故中々苦勞

○三日旅路後函館港ニ達シ谷太郎吉方ヘ止留シタルヲ三日間

○九月一日午前八時波ノ港ヨリ小樽ヘ向ヒ発船、船中無事翌朝十一時過キ小樽ヘ着ク速カニ札幌ヘ向ヒ馬乗ニ而出立時ニ九月二日ノ夜札幌農學ニ着クシタリ

学校之事

○西洋紙、日本紙、日本筆、鉛筆、石筆、智利紙、針、糸、ボタン、二十錢等者毎週ニ相渡シ候

沓足袋ニ足壺ヶ月ニ壺度

衣服、帽子、沓、上沓、雨沓等者壺ヶ年ニ式度

其外硯、墨等者用ヒ修リ毎ニ壺ツ

日課者左之通り

分離学、代数学、作文、手業、演説、講義、日本外史

○食事者朝夕西洋料理ニ御座候得共何分^[L]も志^[L]やけ魚ノ名ニ誠ニ閉口

○日業の外ニ毎土曜日午後七時与^[L]里^[L]演説堂ニ而演説 (但シ演説ハ英語并日本語) 有リ私ハ次之会之英語演説ニ御座候也

○教師皆米國マサチウセツ^[L]ノ人ニ而皆々学者ニ御座候写真者開拓使博物館ニ有之候間御覽被下べき様

○学校之規則者至てゆるく御座候ハ、夜者何時迄勉強致シ候ても宜敷

散歩時間者十二時半与^[L]里^[L]午後八時迄ニ御座候得共用有る節者夜中ニ外出致も出来べき事ニ御座候

○校中ニ在る本ハ何書ニ而拝借致事と能シ

○学校之官員者皆々宜き人ニ御座候

○日曜日ニ者馬を借り遠方へ人も沢山

但シ馬ハ一日三十錢

○市中之形ハ又々後の幸便ニ而

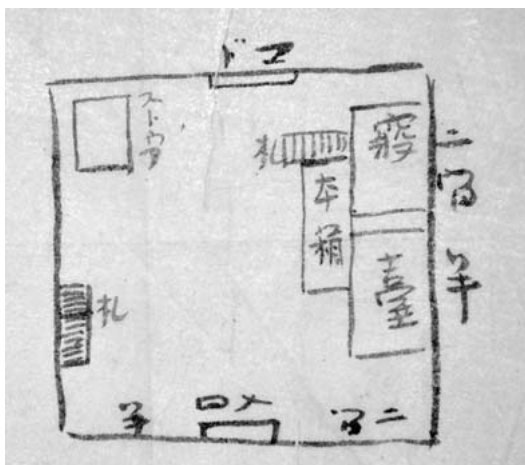
九月三十日

稲造拝

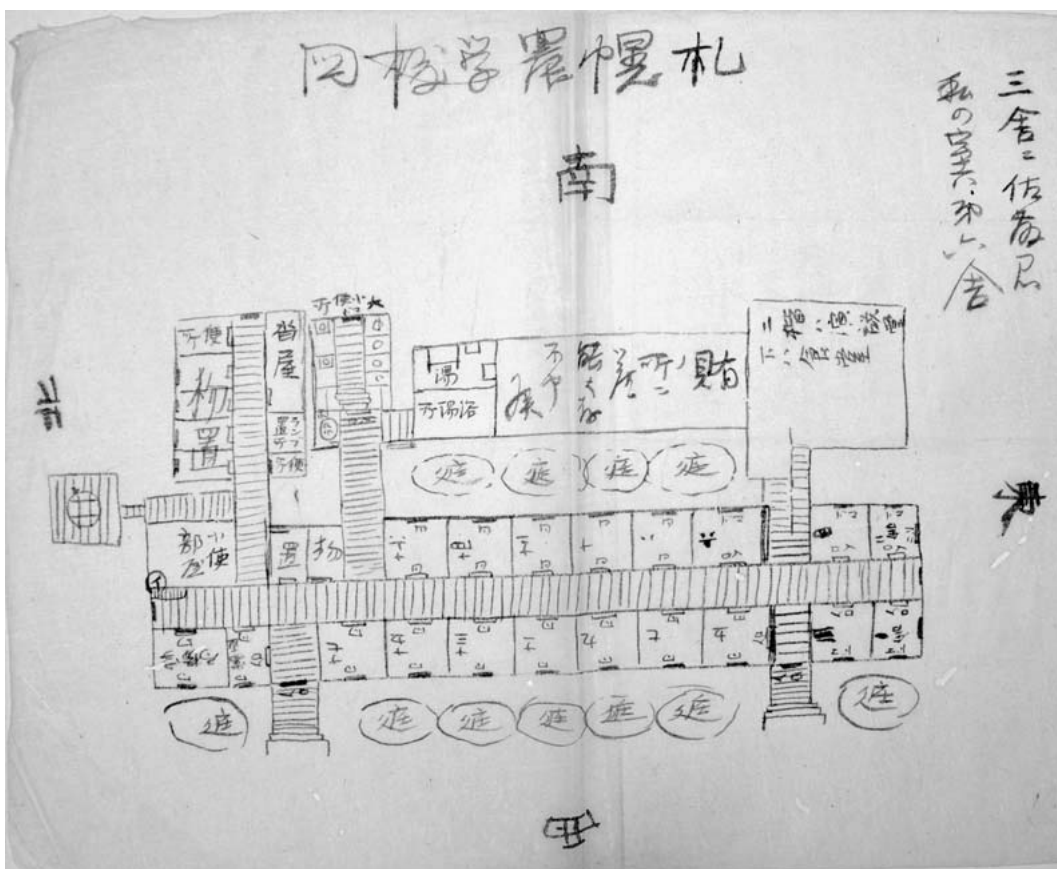
御尊父様

此の事者甚々乍恐出来丈ケ早々

井原君ニ相願候間コウツ著演説書金一円五十錢位クワッケンボス著大文法書一円五十錢位、ミル著論理学并ニ襟紙一箱を御求免被下度願上存候也 多分井原君御宅へ参る可く候間其節丸屋なり山和屋なり西洋書屋ニ而右之書物御求免被下度候也 洋学心得たり人ニ無之候得者甚タ不都合ニ御座候間井原君ニ相頼志也 御不都合ニ御座候得者ミルの論理学^[L]者御求被下間敷とも宜敷



上ハ私并高木玉太郎（広島県ノ人）十五歳
十ヶ月之室ニ御座候



- ④印ハランプノ油の無き時其の所ニ置けバ夜迄ニ小使が入る、所なり
三舎ニ佐藤君
私の室ハ第六舎

[大意]

日に日に益々寒くなりますが、父上様はじめ皆様はご壮健ですので、私はたいへん幸福と思います。

先にご志願で西国へお出でになり、参戦することなくご帰還になりましたこと、私も残念に思います。しかし、一個人の思いで皇国の幸福について、私たちが愚かな説を論ずるべきではありません。

旅中記

○明治10年8月27日午前10時25分、友人7名と共に馬車で東京を出立し、南品川に至り、

同日午後5時、開拓使御用船玄武丸に乗船、翌朝2時半、品川沖を発した。

○清風、静波、満月がみな、私たちを楽しませた。しかし、翌朝1時間ほど波が荒く船酔いとなった。船室は上等ながら一間四方に寝台がある4人部屋であるため、中々の苦勞。

○3日の航行後、函館港に達し、谷太郎吉方へ3日投宿。

○9月1日午前8時、波の立つ港から小樽に向け出発。船中は無事。翌朝11時過ぎに小樽へ着く。直ぐに札幌へ向け馬に乗って出立、9月2日夜、札幌農学校に着いた。

学校のこと

○西洋紙、日本紙、毛筆、鉛筆、石筆、ちり紙、縫い針、糸、ボタン、20銭等は毎週支給です。

靴下2足は1ヶ月に1度。

衣服、帽子、靴、上靴、雨靴等は1年に2度。

その他、硯、墨等はなくなり次第1つ。

授業は、分離学、代数学、作文、手業、演説、講義、日本外史。

○食事は朝食・夕食が西洋料理ですが、献立に鮭が多いのには閉口。

○正規の授業のほかに、毎土曜日午後7時から講堂で英語・日本語の演説会があります。

私は次の会で英語演説をします。

○教師は全員、アメリカ・マサチューセッツ出身の学者です。写真は開拓使博物場ですのでご覧下さい。

○学校の規則は非常に緩やかですので、夜は何時まで勉強しても良い。

外出時間は12時半から午後8時までですが、用事がある場合は夜間に外出することもできます。

○校内の本はどんな本でも貸し出しができます。

○学校の職員は皆、良い人です。

○日曜日には馬を借りて遠くへ行く人も多い。但し、馬のレンタル料は1日30銭。

○市中の様子は次の機会に。

9月30日

稲造拝

父上様

以下のことは恐縮ですができるだけ早く。

井原君に頼んでありますので、コート『演説書』1円50銭くらい、クワッケンボス『大文法書』1円50銭くらい、ミル『論理学』、襟紙1箱をお買い求め下さいますようお願いします。井原君はお宅へ伺うと思いますので、その時に丸屋なり山和屋なりの西洋書籍店で右の書物をお求め下さい。洋学を理解できる人でなければ不都合ですので井原君に頼みました。無理でしたらミル『論理学』はお求め頂かなくても結構です。

〔解説〕

(1) 札幌への旅程

太田は書簡によると、8月27日夕刻に品川で乗船、翌28日未明に出帆し、函館を経由して、9月2日午前中に小樽へ着港、その日の夜に札幌農学校に到着したとある。札幌農学校の日誌は、8月29日の項に「玄武丸今廿九日午前一時東京出帆之趣電信分局^{〔より〕}方報知アリ」、9月3日の項に「東京^{〔より〕}方井川冽新生徒拾八名同行ニテ夜八時着ス」と記録している⁵⁾。第2期生宮部金吾も9月3日到着と回想している⁶⁾。旅程の1日のずれは太田の誤認である。

(2) 学校建物

割り当てられた寄宿舎の部屋は、イラストによると「二間半」四方（12畳程度）に「寝台」と「机」が2人分、ほかに「本箱」と「ストウフ」（ストーブ）を備えている。この一室に高木玉太郎⁷⁾と入室した。

学校建物のイラストでは東西南北の方位表示が間違っている。西・北は正しく、東と南が逆である。建物西側には生徒部屋が17室、「物置」、「小使部屋」、「当直」^{〔事〕}「字務局」がある。太田が「六舎」に、同郷の佐藤昌介⁸⁾が「三舎」に入っている。生徒部屋には入口の向かいに窓があり、外は「庭」となっている。

東側には南端に「二階ハ演説堂／下ハ食堂」と記している。その北側は「賄ノ所ニ御座候／能く存不申候」と厨房であるためよく分からないと説明している。厨房の隣りに「浴湯所」があり、廊下で隔てて「大小便所」が並ぶ。建物北側は「沓屋」、「ランブ置所」^{〔フ〕}、「便所」、「物置」がある。北端に離れて井戸がある。

(3) 洋食

当時の北海道では米の栽培は不可能と認識され、アメリカ式農業の導入を図っていたことなどから、開拓使は洋食を推奨し、札幌農学校での食事にも取り入れた。洋食といっても朝食にはパンにバターに肉、夕食に水っぽいスープと魚と野菜のごった煮といった具合であった。開拓使が捕獲を推奨していた野生のエゾシカの肉や、札幌の街にも遡上してきた鮭が頻繁に食卓に上った⁹⁾。

(4) 授業、外国人教師、規則

札幌農学校の外国人教師は、W. ホイラー (William Wheeler、教頭、工学・数学担当)、D. P. ペンハロー (David Pearce Penhallow、化学・英学担当)、W. P. ブルックス (William Penn Brooks、農学・英学・手業担当) であった。

1877年第1期の初年級の授業時間割りは以下の通りである¹⁰⁾。

	8:30-9:30	9:30-10:30	10:30-11:30	14:00-15:00
月	化学 (ペンハロー)	支那并日本学 (長尾布山)	代数学 (ホイーラー)	
火	化学 (ペンハロー)	支那并日本学 (長尾布山)	代数学 (ホイーラー)	手業 (ブルックス)
水	化学 (ペンハロー)	英学 (ブルックス)	代数学 (ホイーラー)	
木	化学 (ペンハロー)	支那并日本学 (長尾布山)	代数学 (ホイーラー)	
金	化学 (ペンハロー)	支那并日本学 (長尾布山)	代数学 (ホイーラー)	手業 (ブルックス)
土	化学 (ペンハロー)	英学 (ブルックス)	代数学 (ホイーラー)	

書簡の「分離学」は「化学」に当たる。「支那并日本学」は漢籍や和書の講読である。書簡から頼山陽『日本外史』を使用したことが分かる。「英学」は書簡では「作文」「演説」と記している。「手業」は農業実習である。

「手業」のある火・金曜日以外、授業は午前中で終わった。午後には授業の復習を課されていたが、外出することもできた。書簡中の学校の規則が寛容であるとの記述は、外出可能時間が長く、消灯時間も定めがなく、学校蔵書を自由に借り出せるなどの環境を指摘したものであろう。

毎土曜日夜に開催する演説会は「開識社」と言い、全生徒が参加していた。札幌農学校開校後間もなく、W. S. クラーク教頭が英語弁論技術の向上を目的に集会の実施を提案し、生徒が「開識社」を結成して自主的に運営していた。各人の“speech”（演説）、設定した論題に出席者各人が意見発表をする“discussion”（議論）のほか、“debate”（討論）も実施した。1877年10月6日の「開識社」で、太田は“Religion and Superstition”（信仰と迷信）という表題で英語演説を行なった¹¹⁾。

(5) 書籍の注文

書簡で注文した書籍の概要は

コーツ『演説書』は、Henry Troth Coates, *The comprehensive speaker: designed for the use of schools, academies, lyceums, &c: carefully selected from the best authors* (1871年) と推測でき、英語演説の参考書として必要であった¹²⁾。クワッケンボス『大文法書』は、George Payn Quackenbos, *An English grammar* (1864年) である¹³⁾。英語作文の参考書としてであろう。ミル『論理学』とは、John Stuart Mill, *A system of logic, ratiocinative and inductive* を指す¹⁴⁾。日本では『論理学体系』と翻訳する場合が多い。太田は早くから西洋思想に関心を抱いていた。

〔資料3〕 1877年10月27日付け太田時敏宛て太田稲造書簡

- 一翰拝呈仕候
- 過日山内君并ニ於^{〔よ〕〔り〕}鶴殿与里報知有之候処 御尊父様最早御帰京ニ相成候由奉大悦存候
- 非常なる御望を以て西国迄而御出張ニ相成一戦も無之空^{〔し〕}志く御帰京ニ相成候間只々御足^{〔のみ〕}労之已ニ而一己之不利ニ者御座候処皇国之人民ニ於而や大利ニ候間先づ御目出度存上候
- 私事甚々不孝ニ者乍存別尔御相談も不仕当地へ参り候得共実者後来之孝道を尽志可き方法と存候間此ノ地へ参り候処喜音通セズ思尔彼此
- 御当京ニ而者コレヲ病流行之由日々心配仕り候亦た当地ニ於而も先達屯田兵拾余名病死致り候由
- 国争之後速ニ悪病流行致シ甚々哀悲之至リニ存候
- 度々御願申候様ニ者御座候得共川嶋健二并ニ西野古海著述開化用文図書御送被下度願上候也
- 山内君并御尊母様并ニお鶴殿へも宜敷御伝言被下度願上候
- 当時者岩崎親行と申す人（大坂府平民）と共ニ同室ニ住居仕候
- 三日以前五里計リ之遠山ニ雪降り候
- 壹週間毎ニ二度づ、手業と申志^{〔し〕}候て諸道具（クワ、カマ、小刀等）を以て学校之野原ニ而諸仕事致候而て壹時間五銭之割前ニ而一日ニ三時間動^{〔働〕}らき候て壹月之末ニ相成候得者殆んど壹円式十銭ニ相成可く而メ其之時各生ニ動^{〔働〕}らき志金高^{〔し〕}を相渡シ候
- 右之金銭を生徒ニ^{〔私〕}仏ふ事者日本人ニ於而者甚た々賤志^{〔し〕}き様ニ申候得共当校教師之意者生徒ニ金銭之^{〔し〕}価を教へると申志事ニ御座候
- 金銭を^{〔私〕}価を教へると申事者則ち同時間何^{〔ママ〕}幾之仕事を為^{〔し〕}志何程之苦^{〔し〕}勞を為^{〔し〕}志て百性^{〔姓〕}等が何程之金高^{〔め〕}を得能ふかを知らせる為免なり
- 亦た生徒が^{〔親〕}根^{〔り〕}ニ金銭を費やさぬ様
- 学校ニ集会有リ名附て開識社と云ふ佐藤昌介社長荒川書記ニ候
- 内村鑑三、岩崎親行、宮部金吾并私義東京出立以前ニ女色、飲酒、煙草を必らす用ひぬ事を約束仕り候処再び当校ニ而教師三名并生徒一同皆な右同様之誓を致候
- 宗教者米国人之申志^{〔し〕}候通り亦た日本国之諺ニ^{〔し〕}鯛之頭も信心がらと申志候如く一人一己之意ニ有之物ニ而甲者^{〔私〕}仏を信ずると雖^{〔取〕}乙者敗て同宗を信ずるニ不及る物と存候間私事元来耶蘇教を貴びたる故当時者全く彼の宗ニ相成候間小事ニ者御座候得共一寸御報知仕り候
- 当時勉強仕り漢学書者日本外史一日ニ二枚づ、御座候
- 農学学士米国人ブルックス君壹週間ニ式度づ、農学ニ附て講義致り候間次之冬休業中勉強仕り候て日本語ニ直訳仕る心意ニ御座候
- 当使之官員ニ而大里、柄内と申す人有之先日兩度計り佐藤と同道ニ而見舞候
- 乍恐御隙之節者御書状御送り被下度願上候也

- 三日前に5里ほど離れた山に雪が降りました。
- 1週間に2回ずつ手業といって、道具（鋤、鎌、小刀等）を用いて学校の野っ原で作業を行ない、1時間に5銭の手当てで1日3時間働き、毎月末に1円20銭ほどが各生徒の賃金として支払われます。
- 賃金を生徒に支払うことは日本人には非常に賤しいことに感じますが、当校の教師の意図は生徒に金銭の価値を教える点にあります。
- 金銭の価値を教えるというのは、同時間にどれくらいの仕事をし、どの程度の苦勞をして農民がどのくらいの金高を得ることができるかを伝えることです。
- また、生徒が金銭を浪費しないように。
- 学校では集会があり、開識社と言う。佐藤昌介が社長、荒川重秀が書記。
- 内村鑑三、岩崎行親、宮部金吾と私は東京出立以前に、女色・飲酒・喫煙を厳禁する約束をしましたが、当校で教師3名と生徒一同で同様の誓約を結びました。
- 宗教は、アメリカ人が申す通り、また日本の諺「鰯の頭も信心から」という通り、個人の意志によるものであって、甲は仏を信じて乙は信じるに及ばないものと思います。私は元々キリスト教に敬意を持っていましたので、現在は全くキリスト教信者になりました。些細なことではありますがお耳に入れておきます。
- 現在は勉強をしており、漢学書では『日本外史』を1日に2枚ずつ取り組んでいます。
- 農学士アメリカ人ブルックス氏は1週間に2回ずつ「農学」について講義をしますので、次の冬休み中に勉強して日本語訳を行なうつもりです。
- 開拓使の役人に大里、枅内という人がおり、先日、2度ばかり佐藤昌介と一緒に訪問しました。
- 恐縮ですが、お暇なときにお手紙をお送り下さい。
- 有嶋、萩原、石井、斉藤、長固様によりしくご伝言をお願いします。
- 札幌の街中のことは至って無知なので、今回はお話し申しません。しかし、知っていることは隠し立ていたしません。
- 品物の不足は甚だしい。
- しかし、鮭が安価であることも甚だしい。大きな生鮭は1本20銭くらい。
- 栗は非常に小さいが虫は少ない。
- 言葉は盛岡によく似ている。
- 人家は2階建ては珍しく、屋根の上に小石を沢山置く。
- 開拓使庁も学校も屋根に瓦は1枚もなく、すべて厚い屋根板です。
- その理由は左の通りです。

当地の冬は非常に寒く、瓦などではその寒さに耐えることができない。
- 札幌は人口の少なさに比較すると工場が多い。
- 今朝届いた東京大学の友人からの手紙によると、アメリカ人教師スコット（私たちの大学予備門時代の教師）が3週間ばかり前に教室へ西洋の新聞（『ニューヨーク・イブニ

ング・ポスト』)を持って来て生徒に見せた。穂積・中原・岩崎・森田と私が東京英語学校で作った作文が掲載されたとのこと、たいへん稚拙なものですが大喜びいたしました。

10年10月27日

父上様貴下

稲造拝

[解説]

(1) 手業

「手業」は農業実習である。W. P. ブルックスの提案により、労働への報酬として時給5銭を生徒に支給した。新渡戸稲造は後年、賃金を得ることに対する生徒側の反応を「士族気質から賃金を受け取ることは賤しいと考え、胸中では欲しくてたまらないが口では受領の可否を討論するようなこともあった。しかし、一度1円以上の金を受け取ると、『これが額にかいた汗の賃金だ』、『これだけあれば5度は菓子屋に通うこともできる』と心を吹っ切り、手業の賃金の貴賤を論じる者はなくなり、数ヶ月も経たない内に時間割外でも手業の実施を願ひ出る者さえあった」(大意)と、ユーモラスに回想している¹⁵⁾。

(2) 開識社

初期の「開識社」の社長は佐藤昌介、書記は荒川重秀¹⁶⁾と、第1期生で英学成績が優秀な年長者が務めた。

(3) 禁酒・禁煙の誓い

札幌農学校第2期入学予定者が東京で1ヶ月間共同生活をしていたとき、太田と内村鑑三¹⁷⁾、宮部金吾¹⁸⁾、岩崎行親¹⁹⁾は「身を立て道を行なう」目的で立行社を組織した²⁰⁾。

太田が入学する前の札幌農学校では、1876年11月28日にW. S. クラークの指導で外国人教師3名と第1期生が「禁酒禁煙の誓約」を結んだ。酒・煙草・阿片・賭博を禁じ「神の名を汚さない」といった内容であった²¹⁾。書簡にあるように第2期生も誓約に署名した。

(4) キリスト教入信

札幌農学校では、1877年3月5日にW. S. クラークの主導の下、第1期生が「イエスを信ずる者の契約」を結んだ。しかるべき時期に受洗してプロテスタント教会に所属すること、生活を共にする間、聖書を学び、祈禱会を開くことを内容とした²²⁾。太田は入学以前から洋書を通してキリスト教に関心を寄せていたため、入学後1ヶ月足らずでこの契約に署名した。

キリスト教入信を報告する書簡の文章は、養父の懸念・憂慮を見越して、非常に慎重な言い回しとなっている。

(5) M. M. スコット

太田は東京大学予備門時代のM. M. スコット²³⁾の英文学の講義に魅了され、英文学が伝える西洋文化・思想に非常な感化を受けた。同様に影響を受けた予備門同窓の穂積八束・岩崎行親らと文芸活動を行っていたことを窺わせる。

〔注〕

- 1) 新渡戸稲造(1862-1933年)は盛岡で盛岡藩士の家に生まれた。東京で英学を学び、1877年に第2期生として札幌農学校に入学した。卒業後、アメリカ・ドイツ留学などを経て、1891年に札幌農学校教授となり、農業経済学を講じた。1898年に辞職した後は台湾総督府技師、京都・東京帝国大学教授、国際連盟事務次長、貴族院議員などを歴任した。
- 2) 「札幌農学校諸規則」第2章第1節(「取裁録 甲ノ部 明治九年從一月至十二月 農饗」、札幌農学校簿書034、北海道大学大学文書館蔵)。
- 3) 太田は入学条件を遵守する旨の「誓約書」を6月付けで開拓長官黒田清隆宛てに提出している。「入校証書 太田稲造」(札幌農学校簿書062-3、北海道大学大学文書館蔵)。
- 4) 「東京并外諸課文移録 乙ノ部 明治十年一月ヨリ 農饗」(札幌農学校簿書051、北海道大学大学文書館蔵)。
- 5) 「日誌 明治十年一月ヨリ 札幌農学校」(札幌農学校簿書050、北海道大学大学文書館蔵)。
- 6) 宮部金吾博士記念出版刊行会編『宮部金吾』(岩波書店、1953年6月)、35ページ。
- 7) 高木玉太郎(1862-1916年)は広島藩の武家に生まれた。東京大学予備門から、太田らと共に第2期生として札幌農学校に入学した。1889年に住友家に入社し別子銅山に勤務、後に樟脳製造場の技師・責任者となり、日本の精製樟脳事業の先鞭をつけた。
- 8) 佐藤昌介(1856-1939年)は花巻で盛岡藩士の家に生まれた。東京英語学校などを経て、1876年、札幌農学校に第1期生として入学した。卒業後、アメリカ・ドイツ留学などを経て1886年に札幌農学校教授となった。1891年に札幌農学校校長心得に就任して以降、40年間にわたり、校長、東北帝国大学農科大学長、北海道帝国大学総長を務めた。太田稲造は郷里の後輩にあたり、子どもの頃から家族ぐるみの親しい付き合いがあった。
- 9) 常瑤居士(新渡戸稲造)「忘れぬ草」(『蕙林』第11号、札幌農学校学芸会、1894年5月)、37ページ。前掲注6)、『宮部金吾』、65ページ。
- 10) 「外国人贈答録 明治十年壹月 外事課」(簿書01979、北海道立文書館蔵)。
- 11) 「開識社記録 一」(北海道大学大学文書館蔵)。
- 12) H. T. コーツ(1843-1910年)はアメリカ・フィラデルフィアで出版社 Porter and Coates を経営した。
- 13) G. P. クワッケンボス(1826-1881年)はアメリカの教育者で、多くの初等中等用教科書を著した。幕末維新期の日本では、洋学のテキストとしてクワッケンボスの教科書が多用された。
- 14) イギリスの哲学者 J. S. ミル(1806-1873年)が1843年に出版した主著のひとつである。
- 15) 常瑤居士(新渡戸稲造)「忘れぬ草」(『蕙林』第12号、札幌農学校学芸会、1894年7月)、27-28ページ。
- 16) 荒川重秀(1859-1931年)は江戸本所で幕臣の家に生まれた。開拓使仮学校・札幌学校を経て1876年に第1期生として札幌農学校に入学した。卒業後は留学などを経て通信省に勤務した。50歳間近でシェークスピア劇俳優となり、晩年には京都帝国大学法科大学に学ぶなど、異彩を放つ経歴を辿った。
- 17) 内村鑑三(1861-1930年)は江戸小石川で高崎藩士の家に生まれた。東京大学予備門から札幌農学校に第2期生として入学した。留学、教員時代を経て、キリスト教思想家として文筆活動を行なった。
- 18) 宮部金吾(1860-1951年)は江戸下谷で幕臣の家に生まれた。第2期生として札幌農学校を卒業後、留学などを経て札幌農学校・東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学農学部教授なり、植物学を専攻した。
- 19) 岩崎行親(1855-1928年)は讃岐国(香川県)の神官の家に生まれ、東京大学予備門から太田らと共に札幌農学校に第2期生として入学した。卒業後、鹿児島県の中学校長を務めた後、初代の第七高等学校造士館長となった。

- 20) 前掲注6)、『宮部金吾』、33-34ページ。
- 21) 大山綱夫「札幌農学校とキリスト教」(『北大百年史』通説、1982年7月)、554-555ページ。
- 22) 前掲注21)、大山綱夫「札幌農学校とキリスト教」、555ページ。
- 23) Marion McCarrell Scott (1843-1922年)。大学南校・東京英語学校・師範学校など英語教師を務め、明治維新期の英学教育に大きな足跡を残した。

〔凡例〕

- 1、漢字の旧字体・異字体を基本的に常用の新字体に改めた。
- 2、変体仮名・合字を基本的にそのまま表記した。但し、「之」(の)、「者」(は)、「而」(て)、「尔」(に)以外の変体仮名・合字には〔 〕に入れて読み仮名を振った。
- 3、文意の通じにくい誤字・当て字には、正字・読み仮名を〔 〕に入れて文字の上に記した。
- 4、割り注には波下線を付した。

(いのうえ たかあき／北海道大学大学文書館員)